

必修テーマ【漢文】

入試頻出ジャンル 諫言

テーマを学ぶ意義

■「諫言」とは

「諫言」の「諫」は「諫める」と読み、ある人の生き方・方策に対して、他の人がそれを改めるように忠告することを指す。

■入試頻出の理由

漢文には、臣下が君主の過ちを指摘する場面を描く文章が多い。また、起承転結が端的で、ストーリー展開の把握を問う設問が作りやすい。

到達目標

■「諫言」の頻出パターンを知り、肯定／否定の評価を把握しよう

今回は「諫言」の頻出パターン三つを押さえよう。これを知ることによって、臣下側と君主側のどちらが理に適っているのか、どちらが筆者や世間から肯定的な評価をされているのかが判断しやすくなる。文脈から語の意味を類推するときに役立てよう。

例文

『春秋左氏伝』「隱公」より

**A** 往歳、<sup>わうさい</sup> \*ていはくこフ \*たひらキヲ 鄭伯請<sup>ニ</sup>成<sup>一</sup> 于陳。<sup>ちんニ</sup> \*ちんこうず 陳侯不<sup>レ</sup>許<sup>一</sup>。

【訳】以前、（陳に侵攻された）鄭王が陳王に和睦を申し出た。（しかし）陳王はこの和睦を許そうとしなかった。

**B** \*ごほいさメテいハク 「親<sup>レ</sup>」仁善<sup>ニ</sup> \*りんニ 鄰、国之宝也。君其許<sup>レ</sup>鄭<sup>ヲ</sup>。

【訳】五父が諫めて言った、「仁ある者に親しみ隣国と仲善くすることは、国の宝となります。王、どうか鄭王の申し出をお許しください」と。

**C** 陳侯曰、「宋・衛 実難。鄭何能為<sup>一</sup>」。遂不<sup>レ</sup>許<sup>一</sup>。

【訳】陳王が答えた、「わが国にとって宋と衛、両国は実に侵攻することが難しい国である。鄭などは、何もできない国にすぎないではないか」と。結局（この忠告を）聞き入れなかった。

**D** 五月庚申、鄭伯侵<sup>レ</sup>陳 大獲<sup>一</sup>。

【訳】（それから何年かしての）五月の庚申の日、鄭王は陳国を侵略して大いにその土地を奪い取ったのである。

必修テーマ解説講義映像にアクセス!

ZOOM/YouTubeからも映像を視聴いただけます。

【学習メニュー】内の「映像授業（通信教育）」から「購入」ください。



学習時間  
20分

**注**

- \* 鄭伯 || 鄭国の王、荘公。
- \* 成 || 和睦。
- \* 陳侯 || 陳国の王、桓公。
- \* 五父 || 桓公の弟。
- \* 仁 || 仁ある者。
- \* 鄰 || 隣国。
- \* 宋・衛 || 国名。
- ◎ 何能為 || 反語。

**典型的な展開**

**A 発端**〔何らかの**事件・事柄**が発生する〕

国名や君主の名前から始まることが多い。

**B 諫言**〔忠臣・良い官吏かんりなどが、**君主の暴走・姿勢**について**忠告**する〕

① 君主以外の人物が出てきたら要注意。

↓ 諫言の始まりかもしれない。

② 問題文によっては、会話文にカギカッコがついていない場合もある。

↓ 「曰い」「…ト」といった表現から会話文を見つけよう。

**C 反応**〔君主が自分への諫言を、**認めて受容する**／**認めずに拒否する**〕

「答曰こたへ（＝答へて曰はく）」など、君主の名前が出てこずに会話が進む場合もある。発言者の変わり目を意識したい。

**D 結果**〔諫言受容・拒否の**結末**〕

その国や、諫言した臣下がどうなったかが説明される。

**E 後日談**〔その後の評価など〕

筆者の感想・結果・世間の評価などが述べられる。

※例文の後日談については、次のページでふれる。

**訓読**

往歳わうさい、鄭伯成ていぼくたむらぎを陳ちんに請こふ。陳侯許ちんこうゆるさず。五父ごほい諫いめて曰いはく、「仁じんに親したしみ鄰りんに善よくするは、国くにの宝たからなり。君其れ鄭ていを許ゆるせ」と。陳侯曰ちんこういはく、「宋そう・衛ゑいは実まことに難かたし。鄭何ぞ能よく為なさん」と。遂つひに許ゆるさず。五月庚申ごくわつかうしん、鄭伯陳ていぼくちんを侵をかして大おほいに獲えたり。

**1 君主が臣下に諫められる(ハッピーパターン)**

**A** 君主が何か(しよと)する↓多くは君主の過失・無謀な企て。

**B** 臣下が君主を諫める。

- ・たとえ話で婉曲的に、君主の非を批判する。
- ・正論を展開して直接的に、君主の非を批判する。
- ・昔の偉大な君主の例を引き、君主の非を批判する。

**C** 君主が納得して非を改める。

**D** 君主の治める国は繁栄する。臣下も名臣として称えられる。

**E** 後日譚(筆者の感想・結果・世間の評価など)。

- ※ない場合もあり
- ・この部分は、「この文章を書いた筆者の意図は何か」など、**全体の内容説明問題で問われることが多い!**

※このパターンの場合、臣下が名臣で、その提言を受け入れる君主もま

た名君であることが多い。または、『晏子春秋』のように、名臣である晏子の諫言によって、それほど賢くない齊の景公がだんだんと「名君」に育っていくという類の話がある。

## 2 君主が臣下に諫められる(バッドパターン)

**A** 君主が何か(しようと)する↓多くは君主の過失・無謀な企て。

**B** 臣下が君主を諫める。

- ・たとえ話で婉曲的に、君主の非を批判する。

- ・正論を展開して直接的に、君主の非を批判する。

- ・昔の偉大な君主の例を引き、君主の非を批判する。

※ここまでは「パターン1(ハッピーパターン)」と同じ。

**C** 君主は臣下の提言に納得せず、拒否・無視する。

**D** 君主の治める国は窮地に陥る。臣下は処罰されることも。

**E** 後日譚(筆者の感想・結果・世間の評価など)。

※ない場合もあり

・この部分は、「この文章を書いた筆者の意図は何か」など、**全体の内容説明問題で問われることが多い!**

※このパターンの場合、臣下が名臣で、その提言を受け入れられない主君が暗君(＝愚かな君主)であることが多い。殷の紂王、夏の桀王など

暴君の名を覚えておくといよい。

最初に挙げた例文は、典型的なこの「パターン2(バッドパターン)」であり、この話の後日譚は、次のように書かれている。

君子曰、「善不可失、悪不可長、其陳桓公之謂乎。長  
ヲ 惡、不悛、從自及也。雖欲救之、其將能乎。」

### 訓読

君子曰はく、「善は失ふべからず、悪は長すべからずとは、其れ陳の桓公の謂ひか。悪を長じて悛めずんば、從つて自ら及ばん。之を救はんと欲すと雖も、其れ將た能くせんや」と。

### 全訳

(ある) 君子が述べています。「善は失ってはならない、悪は助長してはならないとは、まさに陳の桓公のことを言っているのではないか。悪を助長して改めることがなければ、(その災いは) 自らに及ぶことになる。(そうなるから) これを救おうと思つても、もうそれはどうしようもないことなのだよ」と。

※このように陳王は、自らの判断の間違いから、悔つていた鄭王の反攻を受け、国土を失うことになったのである。

### 3 君主が臣下を注意するパターン

**A** 臣下が君主に提言する↓多くは、何もしようとしない君主に、臣下が他国への侵略・攻撃・籠絡などを持ちかける。

**B** 君主が臣下を諭し、その非を指摘する。

**C** 臣下の申し出は、却下・拒否される。

**D** 君主の治める国は繁栄する。または、衰退するけれど君主の名声は後世に残る。

**E** 後日譚（筆者の感想・結果・世間の評価など）。

※ない場合もあり

・この部分は、「この文章を書いた筆者の意図は何か」など、**全体の内容説明問題で問われることが多い！**

※このパターンの場合、臣下が佞臣（ねいしん）＝君主にこびへつらう、心のよこしまな臣下）か無知で、それを指摘する君主が名君であることが多い。  
宋の襄公（じょうこう）などが例である。

### 読解のポイント

例示した三パターンの中では、臣下が君主に対して、自分の地位や、時として命をかけて忠告するというパターン1・2の話がほとんどを占める。この場合は、次のように三つに分けて文脈をとらえてみよう。

#### 1 君主の言動をチェック！

諫言の対象となる君主の言動は、「諫曰（諫めて曰はく）・奏曰（奏して曰はく）」などで始まる臣下の発言より前に書かれていることが多い。軍事・過酷な税・労役・贅沢・怠惰・不公正・人事など、**臣下が不満を覚える君主の非が示されているので、それを見極めること。**

#### 2 臣下の諫言内容をつかむ

1で確認した君主の非を、臣下がどう諫めるかを押さえる。

##### 「よくある方法」

↓「言い伝え」や関連する「たとえ話」などを挙げ、**具体的なエピソードと現状を対比させて話すこと**で、**現状を客観的に理解させる。**

・「臣（・妾・我・実名など）聞（き）『……』、**今**——」  
《私は聞いています。『……』と。（それに対して）**今は**——」と。》  
・昔、……。 **今**、——」  
《かつては……だった。（それに対して）**今は**——だ。》

※この場合、「**今**（＝現在のありさま）」について述べられている箇所を中心に読んでいけば、臣下の諫言内容がわかる。

3 肯定？ 否定？ 君主の反応をつかむ

ここを読み間違えてしまうと致命的だ。君主の言葉が疑問形や反語形で終わっているときは、特に注意して読み取ろう。

☑ チェックテスト

次の文章を読み、あとの問に答えよ。

1 \* 楚威王、欲伐越。杜子諫曰、「王之伐越、

何也。」曰、「政乱兵弱。」杜子曰、「臣愚、患

智之如目也。能見三百步之外、而不能自見其

睫。王之兵、自敗於秦・晋、喪地数百里。此兵

5 之弱也。\* 莊躄為盜於境内、而吏不能禁、此政之

乱也。王之弱乱、非越之下乎。欲伐越、此智

之如目也。」王乃止。故知之難、不在見人、在

自見。故曰、「自見之謂明。」

〔韓非子〕「喻老第二十一」

注

\* 楚威王 楚国の王。 \* 越・秦・晋 いずれも古代中国の国名。 \* 杜子 楚の国の臣。 \* 臣愚 臣下が自らをへりくだつていう言い方。わたくしめ。 \* 患 憂う。心配する。 \* 莊躄 楚国の盗賊。 \* 非越之下乎 感嘆文。へなんと、越国よりも下ですよの意。

問

杜子の諫言で、「睫」にたとえられたものとは何か。「楚の□□」という形になるように、空欄に当てはまる漢字二文字を文中から抜き出して記せ。

楚の「□□」

## 解答

## 弱乱

## 解説

「政乱兵弱」を理由に越に侵略しようとする王に対して、杜子は、「目」は遠く（＝越の政治が乱れ、兵が弱体化していること）を見ることはできるが、近くの「睫」（＝自国の実態）を見ることができない、と諫言する。楚国の実態とは、秦・晋との敗戦で領土を失った「兵弱」と、盗賊莊躡を取り締まることのできない「政乱」である。むしろ自国こそ「政乱兵弱」だと、王の言葉を逆手にとつて忠告したわけである。「政乱兵弱」を二文字にまとめたのが、正解の「弱乱」となる。

この文章の構造は「パターン1（ハッピーパターン）」にあてはまる。

- A** 楚王は、自国の実態を知らずに越侵略を計画した。  
**B** それに対して杜子は、「目」のたとえ話を持ち出して諫言する。  
**C** 楚王は、それを聞いて侵攻を取りやめる。  
**E** 筆者である韓非子が「知ることの難しさ」についてまとめる。

このように「**D** 君主の治める国は繁栄する。臣下も名臣として称えられる」が書かれない場合もあるので気をつけよう。

また、「**E** 後日譚」は、これまでのエピソードを筆者がまとめた結論である。頻出パターンの構成を知らないと、威王や杜子の言葉がそのまま続いていると勘違いする可能性もあるので、注意が必要だ。

## 訓読

楚の威王、越を伐たんと欲す。杜子諫めて曰はく、「王の越を伐つは、

何ぞや」と。曰はく、「政乱れ兵弱ければなり」と。杜子曰はく、「臣愚、智の目のごときを患ふるなり。能く百歩の外を見て、自ら其の睫を見ることが能はず。王の兵、秦・晋に敗れてより、地を喪ふこと数百里なり。此れ兵の弱きなり。莊躡盗を境内に為して、吏禁ずる能はず。此れ政の乱るなり。王の弱乱は、越の下に非ずや。越を伐たんと欲するは、此れ智の目のごときならん」と。王乃ち止む。故に知の難きは、人を見るに在らずして、自ら見るに在り。故に曰はく、「自ら見る之を明と謂ふ」と。

## 全訳

楚の威王が越の国を伐とうとした。杜子が諫めて言った、「王様はなぜ越を伐とうとなさるのですか」と。（王は）答えた、「（越は）政治が乱れ、兵が弱いからである」と。杜子は言った、「私めは、王様の智慧が目のごときであることを心配するのであります。（目は、王様が越の国を冷静に分析していますように）遠く離れた所から他人を見ることはできるのです、がしかし、自分の睫毛を見ることはできません。王様の兵は秦と晋軍に敗れてから、国土を数百里も奪われて参りました。このことは兵が弱いということでございます。莊躡などという賊が国内で盗みを働いても、警吏はこれを取り締まることができなしております、これは政治の乱れでございます。王様、わが国の弱乱ぶりは、なんと（あの）越の国より下ですよ。越を伐とうなどという企ては、これこそ、その智慧が目のごときであるからに他なりません」と。王はそれで（討伐を）取りやめた。だから知ることの難しさは、他人を見ることではなくて、己自身を見て己自身を知ることにある。だから古人は、「自分自身を見ることが、これを明と言うのである」と述べたのだ。